

目的：近年、住教育、住環境教育の問題が、家庭科教育あるいは大学における住居学の分野で、さまざまな方向から検討されている。こうした中で、本報告は、女子短大の住居学を通して、短大生が、どのように住居をとらえ、問題を展開してゆけるのかを知り、短大における住居学のあり方を探るための一資料を得ることを目的とする。

方法：短大における住居学の一連の講義のうち、「家族生活と住居の対応」の項において出題した課題のレポートから、学生の住生活の実態と住意識をみることにした。対象は、都心の私立T女子短期大学 住居学を履修中の学生 78名である。・各学生の現在の家族状況(人数構成)と、その現在居住している住宅の間取り(室数、配置)・使い方が対応しているか否かについて、各学生の描いた間取図より、食寝分離、就寝分離の実態を把握し、問題の有無を検討、・問題ありと判断できるものについては、その現状の中で、よりよい方向が見出せるか否かをチェックし、・レポートの文中から、各学生の現住居に対する住居批判(問題点指摘の有無、よりよい住まいへの指向性の有無等)を分析・検討した。

結果：住生活の実態では、問題があるのではないかと認められたものは(*参照)、1/3強であった。さらに、問題ありと認められるもののの中で、学生が、食寝分離や就寝分離について、何らかの認識を持っているのは、3/4であり、そのうちの半数からは、住生活の向上や、問題解決への方向が読みとれた。また、自分の部屋については批判できるが、他の家族の住生活上の問題は把握しにくいという傾向がみられた。(*. A. 就寝未分離 B. 就寝分離はできているが寝室が他室と兼用 C. 就寝未分離と居間は食寝未分離が重複 D. 食寝未分離、就寝分離はできているが、居食寝未分離の可能性があるとみなせるもの)。